

2019年2月15日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 蔡嘉紘 学生番号 G5D5032015

〈論文題名〉 感情の表現形式による分類

—直接的表現から客観的表現まで—

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 石川 守

副査 外国語学部教授 遠藤 裕子

副査 外国語学部教授 小林 孝郎

I. 論文の主旨

日本語学習を行う上で、学習者を困惑させるものの一つに、人称や、動作性の有無などによって感情や欲求、あるいは感覚などの表現のしかたが変わるということである。

また、日本語は、感情などを表すための言葉や表現、文法的な形式などが複雑に絡み合い、形容詞だけではなく、動詞、また、擬情語や慣用語などをフルに活用して感情や欲求、あるいは感覚などを表す言語である。また、中国語を母語とする日本語学習者にとって、ほとんど同じ感情や欲求、あるいは感覚などを表す言葉であっても、それぞれ差異があり、そう簡単に置き換えられないものが多く、学習者を一層困惑させることになる。本研究は、このような複雑な日本語の感情や欲求、あるいは感覚などの表現体系を研究し、その使い分けの特徴などによって、新たな分類方法を立てようとするものである。この分類によって感情や欲求、あるいは感覚などの表現全体の構造を明らかにし、より体系的な指導法の基礎とし、日本語教育にいくばくかの貢献をすることを目指すものである。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

第一章	はじめに	6
1.1	研究動機と目的	
1.2	研究方法	
1.3	本論文の構成	
第二章	感情表現の使い分けに関する先行研究	10
2.1	倉持 (1986)	10
2.2	加藤 (2001)	16
2.3	大曾 (2001)	19
2.4	馬場 (2001)	23
2.5	まとめ	24
第三章	感情表現の表現形式	27
3.1	感情表現の特徴	27
3.2	直接感情表現とその下位分類	29
3.2.1	直接感情表現	
3.2.2	直接感情表現の下位分類	
3.3	間接感情表現とその下位分類	32
3.3.1	間接感情表現	
3.3.2	間接感情表現の下位分類	

3.4	直接・間接同形感情表現	36
3.5	まとめ	37
第四章 感情表現の生起性と恒常性		
4.1	感情表現のAspectに関する先行研究	41
4.1.1	森山 (1983)	
4.1.2	小泉 (1989)	
4.1.3	吉永 (2004)	
4.1.4	関口 (2014)	
4.1.5	まとめ	
4.2	感情の生起性と恒常性	45
4.2.1	蔡 (2015)、蔡 (2017) における分類方法	
4.2.2	瞬間的感情と恒常性感情に関する再考	
4.3	表現形式による各分類の生起性と恒常性	49
4.3.1	「直接感情表現」の生起性と恒常性	
4.3.2	「間接感情表現」の生起性と恒常性	
4.3.3	「直接・間接同形感情表現」の生起性と恒常性	
4.4	まとめ	53
第五章 感情表現の各語句の分析		
5.1	研究対象の選定	56
5.1.1	辞典が収集した感情表現の語句	
5.1.2	日本語教育のための基本語彙による選定	
5.1.3	検索例の選定	
5.2	感情表現の各語句の分析	71
5.3	各分類に属す語句および分類の特徴	194
5.3.1	「純粹直接感情表現」の特徴	
5.3.2	「属性直接感情表現」の特徴	
5.3.3	「直接反応間接感情表現」の特徴	
5.3.4	「間接反応間接感情表現」の特徴	
5.3.5	「純粹間接感情表現」の特徴	
5.3.6	「直接・間接同形感情表現」の特徴	
5.4	まとめ	204
第六章 まとめおよび将来の展望		
		210

Ⅲ. 本論文の概要

第一章 はじめに

第一章では、本研究の動機、目的、研究方法および論文概要について論じている。

第二章 感情表現の使い分けに関する先行研究

第二章では、「人称によって使用する言葉が変わる」という感情表現の使い分けのもっとも大きな問題点を検討するため、「人称」に関する先行研究について考察し、それぞれの問題点を検討している。

2.1 節では、倉持の「腹が立つ」と「腹を立てる」(1986)について論じている。

倉持は、「腹が立つ」は、本来は第一人称を主体するものであるが、視点を第三人称に転位すれば、三人称を主語とすることが可能である(主に文学作品において)と述べている。それに対して、「腹を立てる」の主語は、本来は第三人称であるが、自分を客観的に観察するとすれば、一人称も取ることができるとしている。また、倉持は「腹が立つ」は、形容詞に近い性質を併、**「腹を立てる」**は、動詞的な性質が強いという両者の特徴が情意・感覚形容詞とその接尾辞**「-がる」**と似ていると指摘しているという。

2.2 節では、加藤(2001)の感情表現について述べている。加藤は、一人称には形容詞を使い、三人称には動詞を使うという原則を認めるが、例外的な状況があると指摘し、「喜ぶ」と「楽しむ」を比較している。「楽しむ」は状況によって主語を一人称にすることができるという柔軟性を持っているが、「喜ぶ」はそのような柔軟性を持っていないと述べている。言い換えれば、動詞によってその人称制限の度合いが異なるものだとしている。

また、対応する感情形容詞が存在しない感情動詞は「テイル形」を使えば一人称の主語を取ることが可能である。しかし、形容詞のように一人称を取っても、感情表現のニュアンスは異なってくると、加藤は指摘している。また、テイル形の他に、夕形でも人称制限を解除できるとし、これは小説や物語の文の場合に限られているとしている。

2.3 節では、大曾(2001)を取り上げ、一部の感情動詞(句)は感情形容詞と同じような人称制限があると指摘し、その制限を解除する方法をまとめている。

まず、大曾は「思う」、「困る」、「いらいらする」、「はらはらする」、「ひやひやする」、「わくわくする」、「腹が立つ」、「胸が痛む」、「胸が躍る」のような動詞(句)または擬態語は形容詞のように三人称の主体にならないという人称制限があると指摘していると述べている。

さらに、感情主自身の感情を第三者の感情の四つの表現形式について述べている。

- ① 「-がる」
- ② 「-む」、「-する」

③ 「一ている」

④ 他動詞

まず、①「一がる」について、形容詞の感情表現を第三者が表す時、接尾辞「一がる」を加えて表すと述べている。

②の「一む」、「一する」について、感情形容詞に「一がる」を付加できるかどうかによって、二つのタイプに分け、「一がる」と共起しないグループは、第三者が感情を表す時、「一む」あるいは「一する」（「楽しむ」、「心配する」）を使う。また、「一む」と「一がる」ともに共起出来るグループは「一がる」が感情表出の描写に使われているのに対し、「一む」は事物の性状規定、つまり感情的品定めに使われているとしている。

また、「思う」、「困る」、「いらいらする」、「はらはらする」のような感情動詞または擬態語の場合、第三者の感情表現には「一ている」を使う必要があると述べている。

また、「腹が立つ」、「胸が痛む」のような自動詞を持つ動詞句の場合、第三者の感情表現はその自動詞に対応する他動詞を使うと述べているとしている。

2.4 節では、馬場（2001）について取り上げ、三人称の主語が「ハラガタツ／アタマニクル／ムカツク」をテイル形で表す時、それぞれ許容度が違うと指摘している。

馬場は、この問題を説明するために、神尾（1990）¹の「なわばり理論」と柳沢（1994）²の「報告性」の概念を引用し、「テイル形」が「報告者によって認知された確信度の高い情報」を表すものとし、それ以外の「ようだ／みたいだ／らしい」といったモダリティは「確信度が強くない情報」を表すものとしていると述べている。

また、「ハラガタツ」という感情主の感情が報告者のなわばりの「外」にあり、報告者は感情主の感情への確信度が低いので、報告者は感情主の感情を三人称主語として述べる時に「テイル形」を使うことができず、（ようだ／みたいだ／らしい）を用いないと報告できない。一方、「アタマニクル／ムカツク」は、感情主の感情が報告者のなわばりの「内」にあるので、捉えることが出来、テイル形をある程度使えると主張しているという。

2.5 節では、「人称」に関する先行研究をまとめている。従来の先行研究において、一人称には形容詞を使い、三人称には動詞を使うという共通認識があるが、倉持は「腹が立つ」、「腹を立てる」、加藤は「楽しむ」、大曾は「思う」、「困る」、「いらいらする」や「胸が躍る」といった感情動詞（句）や擬態語でも一人称が使えると指摘している。

ここで、筆者は、「テイル形」、「タ形」および「ようだ／みたいだ／らしい」といったモダリティを付加することによって主語を 三人称 に変更することが可能なので、人称によって感情表現の言葉を区別することは不適切であると思われるとしている。

また、倉持と加藤は感情動詞（句）の中で、性質は動詞より形容詞に近い言葉を発見した

1 神尾 昭雄（1990）『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』大修館書店

2 柳沢 浩哉（1994）「テイル形の非アスペクト的意味—テイル形の報告性」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』pp165-178、三省堂

「腹が立つ」、「楽しむ」)。さらに加藤は「楽しむ」と「楽しい」、大曾は「一む」動詞と「一がる」という接尾辞は、同じ人称で表されてもその感情表現のニュアンスは異なるとしていることを指摘している。

第三章 感情表現の表現形式

3.1の「感情表現の特徴」では、寺村(1982)は感情動詞を二つのタイプに分け、その特徴を以下のように二つの種類に分類していることを指摘している。

- 感情の表現形式： (1) 感情を表情または動作で表すもの
(2) 話し手自身の気持ちを直接に表出するもの

また、神尾(1990)の「なわばり理論」は自分の領域(なわばり)の内にある情報は直接形で表現可能であり、それ以外の情報は間接形を用いなければならないと述べている。この寺村と神尾の二つの理論から、筆者は「直接感情表現」と「間接感情表現」という二つの分類を新たに立てている。この分類から、寺村の一部の感情動詞の特徴は、その感情動詞に対応する感情形容詞にもある(悲しむ、悲しい)と指摘を基に、次のような分類方法が可能であるとしている。

- ① 「直接感情表現」：内在的、感情主だけが直接知り得る感情の表現
② 「間接感情表現」：外在的、表情または動作などで表わされる感情の表現

さらに、筆者は、この「直接感情表現」と「間接感情表現」の両者になり得る感情表現を「直接・間接同形感情表現」と呼んでいる。

- ③ 「直接・間接同形感情表現」：「直接感情」も「間接感情」も表せる感情表現

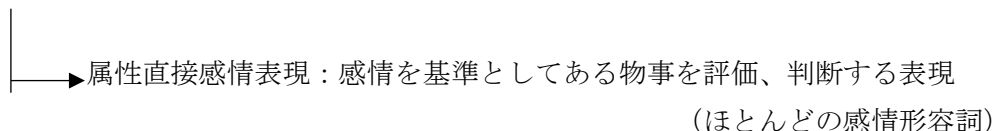
3.2節では、直接感情表現とその下位分類の定義および特徴について論じている。

3.2.1では、直接感情表現の特徴について論じ、直接感情表現のもっとも顕著な特徴はその感情が感情主自身のみが知り得るものであるということであるとしている。通常これは第一人称になるが、小説や物語の筆者は「神の視点」を持っているため、登場人物の内面に入り、その思いや感情などを直接知ることが可能であるので、第三者の直接感情も自身の感情として観察できるとしている。

3.2.2では、直接感情表現の下位分類とその特徴について論じている。直接感情表現は内在的であり、感情主のみが直接知り得る感情表現であるが、その感情そのものを基準としてある物事を評価、判断することもできるとしている。この属性的に表される感情表現と純粹に感情そのものを表す感情表現とを区別するため、「純粹直接感情表現」と「属性直接感情

表現」に分けている。

純粹直接感情表現：純粹に感情そのものを表す感情表現（ほとんどの感情形容詞）

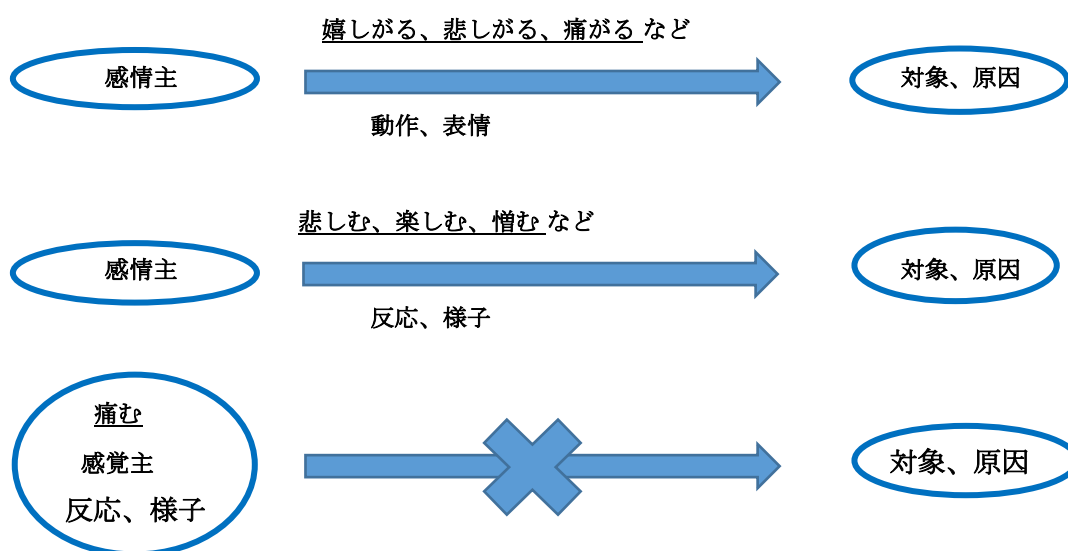


3.3節では、間接感情表現とその下位分類の定義および特徴について論じている。

3.3.1では、間接感情表現の特徴について論じ、この間接感情表現が外在的な表情または動作などで表わされる感情表現であるため、必ず外部から観察可能であるとしている。また、自分自身を客観的に述べる場合には、一人称感情主で間接感情表現を表すことも可能であるとしている。

3.3.2では、間接感情表現の下位分類とその特徴について論じている。明確な動作あるいは行為などで外部に感情を表す感情形容詞の接尾辞「-がる」に対して、感情形容詞の動詞化（「-む」動詞など）は、感情主がある対象に対する、あるいは、原因から生じる感情的反応であるとしている。

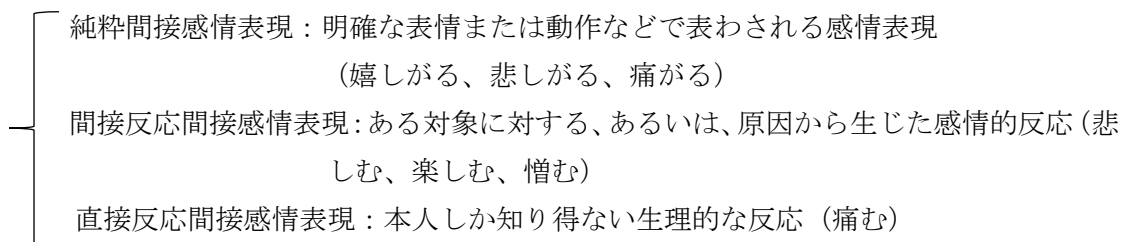
さらに、「痛む」は志向性がなく、痛みから生じてくる本人しか知り得ない生理的な反応であり、直接感情表現に極めて近いが、それ自体反応であるため、その反応が外部に表出され観察することが可能かもしれないが、そのような用例は見つけることができなかったとしている。



【図1】 接尾辞「がる」、感情形容詞の動詞化、「痛む」との差異

筆者は、この三者を区分するため、「純粹間接感情表現」「間接反応間接感情表現」「直接

反応間接感情表現」といった新たな下位分類を立てている。




3.4 節では、直接・間接同形感情表現の定義および特徴について論じている。直接感情または間接感情を表す感情表現のほかに、直接感情と間接感情のその両者を表すことができる「直接・間接同形感情表現」が存在するとし、この感情表現は「直接感情表現」または「間接感情表現」の感情表現と同様、人称に制限されないと指摘している。

3.5 節では、表現形式による新たな分類方法をまとめ、各分類の定義と相互関係を以下のように示している。

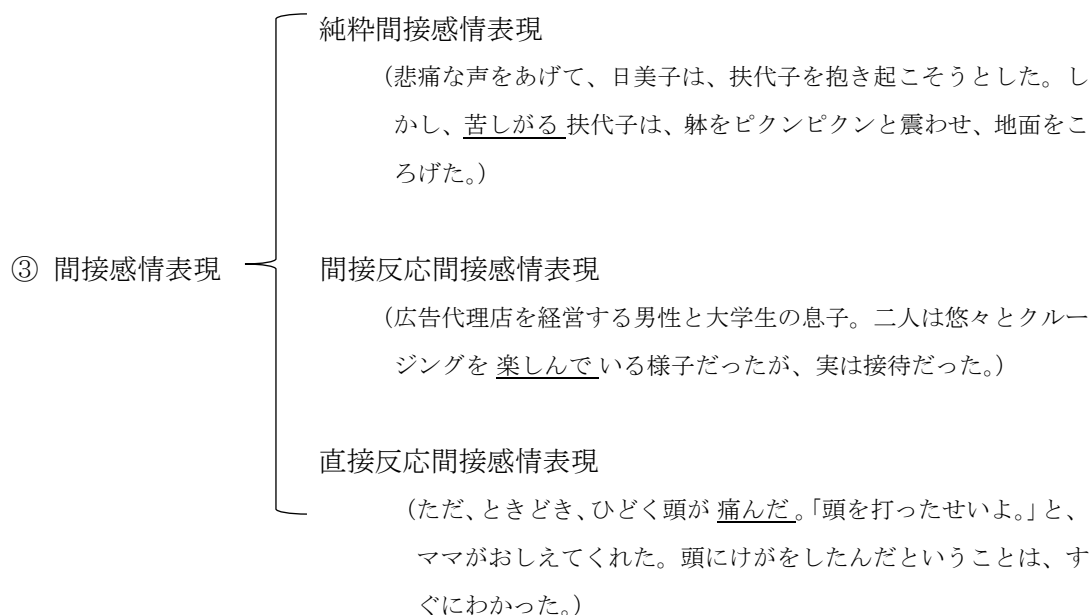
【各分類の定義】

- ① 「直接感情表現」：内在的、感情主のみが直接知り得る感情の表現
 - 「純粹直接感情表現」：純粹に感情そのものを表す感情表現
 - 「属性直接感情表現」：感情を基準としてある物事を評価、判断する表現
- ② 「直接・間接同形感情表現」：「直接感情」も「間接感情」も表せる感情表現
- ③ 「間接感情表現」：外在的、表情または動作などで表わされる感情の表現
 - 「純粹間接感情表現」：明確な表情または動作などで表わされる感情表現
 - 「間接反応間接感情表現」：ある対象に対する、あるいは、原因から生じた感情的反応
 - 「直接反応間接感情表現」：本人しか知り得ない生理的な反応

【各分類の相互関係】

- ① 直接感情表現— 純粹直接感情表現
(本当に 悲しかった し、悔しかったですよ。誰も僕の言うことなんて信用してくれないわけですから。) 
属性直接感情表現
(子供ができたら、ある程度大きくなると皆で集まったりとかもできな いしね。女って 悲しい ですね…。)

② 直接・間接同形感情表現 (彼女が僕のことを 愛してくれて僕も彼女が 好きなら付き合います。)



[図2] 表現形式による感情表現の分類方法

第四章 感情表現の生起性と恒常性

4.1 節では、感情表現の表現形式に大きく影響する要素として直接性と間接性の他に生起性と恒常性の問題を取り上げ論じている。

4.1.1 では、森山 (1983) は動詞と期間成分 (～間、暫く、等) あるいは、特定の動詞 (続ける、始める、終わる) が共起することの有無により、動詞の素性 (持続性、過程性、終結性など) を判断している。この中で、感覚、心理状態、態度などを表す動詞は、動きの全体量ということでは設定され得ず、動きの終結点はないという説について述べている。

4.1.2 では、小泉 (1989) のテイル形の意味についての五分類の中で、「心の状態の持続」というタイプは物理的な動作・動きではなく、心的な動作であり、動きの始まりと終わりが定かではなく、心の動作である「喜ぶ」と「悩む」などの動詞は始まりと終わりが定かでないという特徴があるという指摘について述べている。

4.1.3 では、吉永 (2004) は、感覚自動詞 (見える、聞こえる、痛む、痺れる、飢える、渴くなど) と形容詞と類似しているが、時間と空間とに関わることができるという点で形容詞と大きく異なり、「時々」との共起により、異なる時間に生じたある感覚を 断続的に体感できる という点で、明らかに形容詞、心理動詞や状態動詞とは異なるという指摘を取り上げている。

4.1.4 では、関口 (2004) を取り上げ、心理動詞に局面動詞を結び付けることによって、

そこに「時間」が存在することが証明されるという考え、さらに感情動詞を「継続の感情動詞」と「短期継続の感情動詞」を分類していることについて述べ、区分する基準については説明していないと指摘している。

4.1.5 では、感情表現のアスペクトに関する先行研究をまとめている。森山（1983）、および小泉（1989）は心の動きである感情動詞には明確な終わりが存在しないという指摘、また、関口（2014）の、もし感情・感覚動詞に終わりが存在しないとすれば、心の動きの絶対時間を測ることは不可能に近いと言えるであろうという指摘、吉永（2004）の感覚動詞は断続的な持続性という重要な特徴が有していると指摘について述べている。

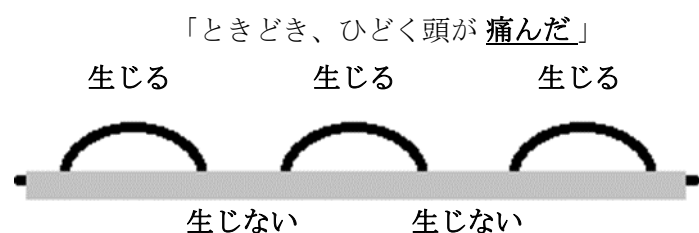
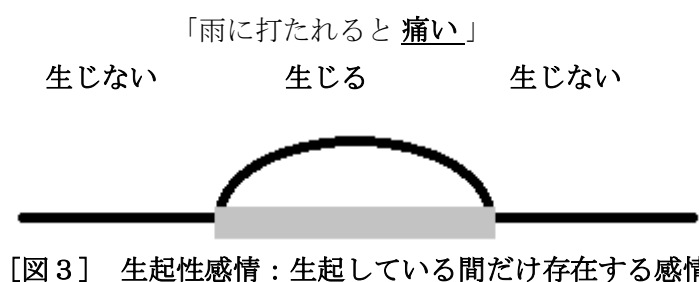
4.2 節の「感情の生起性と恒常性」では、前節の森山、関口、吉永の指摘から感情の生起性と恒常性の特徴を検討し、かつての筆者自身の分類方法を再考している。

まず、筆者自身の論文（2015）を取り上げ、そこでは以前行った感情表現を持続時間によって次の二つに分類していることについて再考している。

「瞬間的感情」： 一瞬またはしばらくして消え去る感情

「恒常的感情」： 一定の時間を継続、維持する感情

この二つの持続時間による分類について、森山（1983）、小泉（1989）、関口（2014）の心の動きの絶対時間を測ることは極めて困難であるという指摘から、心の動きと強く関わる感情表現を持続時間の長さで分類することは不適切であると考え、持続時間による分類を再考し、断続的に生じる痛覚を表す「痛む」、「疼く」と、生じる間だけを表す「痛い」とには明確な差異が存在すると考え、以下の図のように区別し、「生起性感情」と「恒常性感情」と新たに名付けている。



[図4] 恒常性感情：生じているか、生じていないかに関わりなく常に存在する感情

また、恒常性感情を表す感情表現は、感覚表現のように時間要素を含む言葉（時々、たまに）と共起しないが、感情の生じている期間と、生じていない期間を区別することが出来る。

このことから、筆者はかつて主張した持続時間による分類を修正し、以下のように改めて定義している。

生起性感情：生起している間だけ存在する感情

恒常性感情：生じているか、生じていないかに関わりなく常に存在する感情

4.3節では、前章で提出した表現形式による分類がどのような特徴を持っているかについて検証している。

4.3.1では、直接感情表現の下位分類の生起性と恒常性について検証している。純粹に感情を表す「純粹直接感情表現」は、その時だけ生起し、消えていくという特徴によって「生起性感情」に分類している。これに対して「属性直接感情表現」は物事に対する評価、判断であるため、ある時に生じてくる一時的な感情ではなく、ある対象に対する恒常的な感情であり、「恒常性感情」であるとしている。

4.3.2では、間接感情表現および下位分類の生起性と恒常性について検証している。典型的な間接感情表現の言葉（泣くなど）、あるいは接尾辞「一がる」は動作性が強く、外部から観察しやすいので、直接観察可能な「生起性感情」となる。これに対して「直接反応間接感情表現」は生起と消滅とが断続的に生じる生理反応であるので、「恒常性感情」に属すとしている。また、「間接反応間接感情表現」は動作性の弱い反応または様子で表わされるため、一回きりの「生起性感情」で表すことも可能であるが、その様子を状態的なものとして捉えれば、何度も観察可能であるので、「恒常性感情」とすることも可能であると述べている。

4.3.3では、直接・間接同形感情表現の生起性と恒常性について検証している。直接・間接同形感情表現は感情主のみが知り得る気持ちであり、「直接感情表現」として使うことができる。この感情は生じているか、生じていないかに拘わらずに、長時間にわたる感情主の傾向を表すため、第三者からも、その日常の言動や習慣などから観察可能であり、「間接感情表現」のように使用できる。逆に言えば、生じているか、生じていないかに拘わらずに、長時間にわたるといって「恒常性感情」の特徴を有しているため、「直接・間接同形感情表現」ともなり得ると述べている。

4.4では、各分類の生起性と恒常性の特徴についてまとめ、各感情表現の分類と生起性と恒常性の性質との関係を以下のように示している。

生起性感情：生起している間だけ存在する感情

「純粋直接感情表現」 （「楽しい」、「悲しい」、「嬉しい」など）

「純粋間接感情表現」 （「悲しがる」、「泣く」など）

恒常性感情：生じているか、生じていないかに関わりなく常に存在する感情

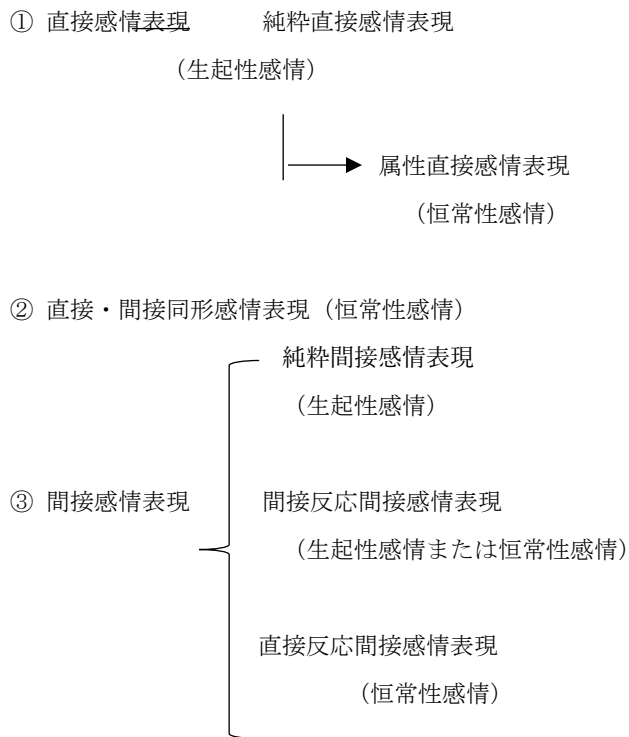
「属性直接感情表現」 （「悲しい」、「苦しい」など）

「直接反応間接感情表現」 （「痛む」、「疼く」など）

「直接・間接同形感情表現」 （「好き」、「嫌い」など）

生起性感情または恒常性感情

「間接反応間接感情表現」 （「楽しむ」、「苦しむ」など）



[図5] 表現形式による分類の生起性と恒常性

第五章 感情表現の各語句の分析

5.1節では、研究対象とする個々の語句の選定、用例の収集について述べている。

5.2節では、選定した感情表現の各語句を分析し、各語句がそれぞれ属すべき分類とその特徴を明らかにした。

5.2.1から5.2.38は、それぞれの語句について分析している。

5.3節では、各分類に属す語句の特徴について分析している。

5.3.1では、「純粋直接感情表現」に属す語句の特徴を分析し、「純粋直接感情表現」とは内在的で、感情主だけが直接知り得る感情の表現の中で、純粋に感情を表す感情表現であり、すべての感情形容詞はこの分類に属すと述べている。

また、「愛する」、「恨む」と「恐れる」は品詞としては動詞であるが、意味的に対応する感情形容詞が存在せず、また、これらの感情が長時間にわたる抽象的、状態的なものであり、外部から判断することは極めて困難なものであるため、「(純粋)直接感情表現」とすることができるとしている。

「純粋直接感情表現」は、ほとんどが「生起性感情」であると述べている。しかし、「怖い」に関しては「恒常性感情」の性質を持ちながら、同時に「純粋直接感情表現」であり、「間接感情表現」を表す時には、「好き／嫌い」のようにそのままは使えず、「怖がる」などの表現を使わなければならないとし、「直接・間接同形感情表現」には属しないと述べている。

「純粋直接感情表現」に属す語句の特徴

1. 内在的、感情主だけが直接知り得る、純粋に感情を表す感情表現
2. 外部から観察することができない
3. 生起性感情の性質を有している（怖いは例外である）
4. すべての感情形容詞と一部の慣用句が属す

5.3.2では、「属性直接感情表現」に属す語句の特徴を分析している。「属性直接感情表現」は感情を客観的な基準として物事を評価、判断する表現である。ほとんどの「直接感情表現」の感情は一般的に認識される共通感情であり、「属性直接感情表現」に転用することができるという。しかし、一部の「欲求」、「好悪」に関する感情表現は個人的な価値観に大きく左右されるものであり、一般的な基準とすることは不適切なため、「属性直接感情表現」として使うことができないとしている。

また、「直接感情表現」には属さないが、「落ち着く」は慣用用法の「タ形」で、例外として「属性直接感情表現」に属することになると述べている。

「属性直接感情表現」に属す語句の特徴

1. 感情を基準としてある物事を評価、判断する表現
2. 主観的な感情表現ではなく、客観的に物事の性質を評価する
3. 欲求、好悪など個人の価値観により標準が大きく変わる感情表現を使うことができない
4. ほとんどの感情形容詞が属す（3.の該当する形容詞は属さない）

5.3.3 では、「直接反応間接感情表現」に属す語句の特徴を分析している。「痛む」は外部の刺激ではなく、感覚主自身の内部の痛みによる反応であるので、その反応が外部に表出され、それを観察することは可能かもしれないが、このような用例は調査した限りでは、見つけることができなかつたと述べている。

「直接反応間接感情表現」に属す語句の特徴

1. 本人しか知り得ない生理的反応を表す
2. 動作性が弱く、外から観察しにくい
3. 恒常性感情の性質を有している
4. 感情主自分で表すこと、あるいは外からの推測することが多い

5.3.4 では、「間接反応間接感情表現」に属す語句の特徴について分析している。これに属す「一む」動詞（悲しむ、苦しむ）および副詞（+する動詞）（いらいらする、がっかりする）は、感情によるわずかな反応または様子を被動的に表すものであるが、「驚き」や「怒り」のような激しい感情を受けると、しばしば反応が大きくなり、明らかな動作にまで発展することになるので、「純粹間接感情表現」にも属することになる。あるいは他の動詞（泣く、嘆く）と結び付いてその動作性が強くなることで「純粹間接感情表現」になることもある（悲しむ）と述べている。

「間接反応間接感情表現」に属す語句の特徴

1. ある対象に対する、あるいは、原因から生じた感情的反応
2. 動作性が弱い、反応・様子で観察することができる
3. 主に副詞と感情形容詞に対応する「一む」動詞が属す
4. 「驚き」、「怒り」の感情表現は刺激の強さによって動作まで表すことがある
5. 他の動詞と結び付いて動作性を強くすることがある

5.3.5 では、「純粹間接感情表現」に属す語句の特徴を分析し、次の三つのグループに分けている。

- ① 感情形容詞の接尾辞「一がる」、怒る、泣くや笑うなど明確な動作・表情で表す感情表現
- ② 「間接反応間接感情表現」に属す「驚き」または「怒り」を表す語句
- ③ 「直接・間接同形感情表現」に属す語句

また、かつて用いられていた「惜しがる」と「嬉しがる」が現在ほとんど使われなくなっているため、同じ感情形容詞に対応する「惜しむ」、「喜ぶ」がその役割を引き受け、動作性

が強くなり、「純粹間接感情表現」に属することになっていると述べている。

また、「怖がる」は、対応する感情形容詞「怖い」があるので、「直接・間接同形感情表現」ではなく、「純粹間接感情表現」に属することになると述べている。

「純粹間接感情表現」に属す語句の特徴

1. 外在的、表情または動作などで表わされる感情の表現
2. 動作性が強く、容易に観察可能である
3. すべての接尾辞「一がる」、一部の感情動詞と「一む」動詞が属す
4. 生起性感情の性質を有している（怖がるは例外である）
5. 使用率が低い接尾辞「一がる」の代わりに、「一む」動詞（あるいは同じ感情形容詞に対応する動詞）の動作性が強くなることがある（喜ぶ、惜しむ）

5.3.6 では、「直接・間接同形感情表現」に属す語句の特徴を分析している。この分類に属す語句は「直接感情表現」として使うことができる感情動詞と「間接感情表現」として使うことができる感情形容詞の二つのタイプであると述べている。

「愛する」、「恨む」と「恐れる」は品詞としては動詞であるが、対応する感情形容詞が存在しない。その上、「愛憎」や「恐怖」などの感情は瞬間的なものではなく、長時間にわたる抽象的、状態的なものである。これらは外部から単一の反応または動作で判断することが極めて困難なので、直接に観察するのではなく、日常的な言動、習慣などからその「状態」を知ることになる。言い換えれば、感情主がこの種の感情動詞で表す時に、第三者からの観察は不可能なので、「(純粹) 直接感情表現」として使うことができると述べている。

また、「好き」、「嫌い」は、品詞としては感情形容詞であるが、この感情は一時的なものではなく、傾向という長時間にわたる状態的なものなので、「恒常性感情」の性質を有している。従って、感情主を対象にし、その「傾向」を日常の言動、習慣などから「間接感情表現」のように観察することが可能であるとしている。

もう一つの例外は、「怖い」、「怖がる」が「恒常性感情」の性質を持ちながら、形容詞と「一がる」の対立関係を有しているということである。このため、「怖い」という傾向を持つ感情主を対象にして観察する時、「好き／嫌い」ように同一の語で表すことはできず、「怖がる」で第三者の傾向を表すことになると述べている。

「直接・間接同形感情表現」に属す語句の特徴

1. 「直接感情」も「間接感情」も表せる感情表現
2. 「恒常性感情」の性質を有している
3. 「間接感情表現」で表す時、直接観察することではなく、日常の言動、習慣から知る
4. 「愛憎」、「好悪」、「恐怖」など抽象的、状態的な「傾向」に限る

5. 形容詞と接尾辞「-がる」のような対立関係が存在しない

5.4 節では、各分類に属す語句および、その特徴を次のような表にしている。

直接感情表現		直接・間接同形 感情表現	間接感情表現		
純粹直接感情表現	属性直接感情表現		純粹間接感情表現	間接反応間接感情表現	直接反応間接感情表現
ありがたい	ありがたい	愛する	呆れる	焦る	痛む
痛い	痛い	恨む	焦る	いらいらする	
嫌	嫌	恐れる	慌てる	落ち着く	
嬉しい	嬉しい	好き	ありがたがる	驚く	
おかしい	おかしい	嫌い	痛がる	がっかりする	
惜しい	惜しい		嫌がる	悲しむ	
面白い	面白い		いらいらする	感じる	
悲しい	悲しい		喜ぶ	悔やむ	
かわいそう	かわいそう		嬉しがる	苦しむ	
悔しい	苦しい		おかしがる	困る	
苦しい	怖い		怒る	楽しむ	
怖い	寂しい		惜しむ	懐かしむ	
寂しい	残念		惜しがる	悩む	
残念	楽しい		驚く	憎む	
楽しい	辛い		面白がる	腹を立てる	
辛い	懐かしい		悲しむ	びっくりする	
懐かしい	憎い		悲しがる		
憎い	恥ずかしい		感じる		
恥ずかしい	落ち着く		悔しがる		
腹が立つ			苦しがる		
欲しい			怖がる		
			寂しがる		
			残念がる		
			辛がる		
			泣く		
			……		

[表 1 4] 「感情表現」の各分類の語句一覧表

直接感情表現		直接・間接同形 感情表現	間接感情表現		
純粹直接感情表現	属性直接感情表現		純粹間接感情表現	間接反応間接感情表現	直接反応間接感情表現
ありがたい	ありがたい		ありがたがる		
痛い	痛い		痛がる		痛む
嬉しい	嬉しい		喜ぶ/嬉しがる		
おかしい	おかしい		おかしがる		
惜しい	惜しい		惜しむ/惜しがる		
面白い	面白い		面白がる		
悲しい	悲しい		悲しむ/悲しがる	悲しむ	
悔しい			悔しがる	悔やむ	
苦しい	苦しい		苦しがる	苦しむ	
怖い	怖い		怖がる		
寂しい	寂しい		寂しがる		
楽しい	楽しい			楽しむ	
辛い	辛い		辛がる		
懐かしい	懐かしい		懐かしがる	懐かしむ	
憎い	憎い			憎む	
恥ずかしい	恥ずかしい		恥じる/恥ずかしがる		
欲しい			欲しがる		

【表 1 5】 感情形容詞および形容詞の動詞化と接尾辞「がる」の一覧表

直接感情表現		直接・間接同形 感情表現	間接感情表現		
純粹直接感情表現	属性直接感情表現		純粹間接感情表現	間接反応間接感情表現	直接反応間接感情表現
嫌	嫌		嫌がる		
かわいそう	かわいそう				
		嫌い			
残念	残念		残念がる		
		好き			

【表 1 6】 感情形容動詞および形容動詞の接尾辞「がる」の一覧表

直接感情表現		直接・間接同形 感情表現	間接感情表現		
純粹直接感情表現	属性直接感情表現		純粹間接感情表現	間接反応間接感情表現	直接反応間接感情表現
		愛する			
			呆れる		
			焦る	焦る	

			慌てる		
			いらいらする	いらいらする	
		恨む			
			怒る		
		恐れる			
	落ち着く			落ち着く	
			驚く	驚く	
				がっかりする	
			感じる	感じる	
				困る	
			泣く		
				悩む	
腹が立つ			腹を立てる	腹を立てる	
			びっくりする	びっくりする	
			笑う		

[表 1 7] 感情動詞、句（感情形容（動）詞の動詞化を除く）の一覧表

直接感情表現	純粋直接感情表現	<ol style="list-style-type: none"> 1. 内在的、感情主だけが直接知り得る、純粋に感情を表す感情表現 2. 外部から観察することができない 3. 生起性感情の性質を有している（怖いは例外である） 4. すべての感情形容詞と一部の慣用句が属す
	属性直接感情表現	<ol style="list-style-type: none"> 1. 感情を基準としてある物事を評価、判断する表現 2. 主観的な感情表現ではなく、客観的に物事の性質を評価する 3. 欲求、好悪など個人の価値観により標準が大きく変わる感情表現を使うことができない 4. ほとんどの感情形容詞が属す（3. の該当する形容詞は属さない）
間接感情表現	直接反応間接感情表現	<ol style="list-style-type: none"> 1. 本人しか知り得ない生理的な反応を表す 2. 動作性が弱い、外から観察しにくい 3. 恒常性感情の性質を有している 4. 感情主自分で表すこと、あるいは外からの推測することが多い
	間接反応間接感情表現	<ol style="list-style-type: none"> 1. ある対象に対する、あるいは、原因から生じた感情的反応 2. 動作性が弱い、反応・様子で観察することができる 3. 主に副詞と感情形容詞に対応する「一む」動詞 4. 「驚き」、「怒り」の感情表現は刺激の強さによって動作まで表すことがある

		5. 他の動詞と結び付けて動作性を強くすることがある
	純粹間接感情 表現	<ol style="list-style-type: none"> 1. 外在的、表情または動作などで表わされる感情の表現 2. 動作性が強い、容易く観察することができる 3. すべての接尾辞「一がる」、一部の感情動詞と「一む」動詞が属す 4. 生起性感情の性質を有している（怖がるは例外である） 5. 使用率が低い接尾辞「一がる」を取り替わるため、「一む」動詞（あるいは同じ感情形容詞に対応する動詞）の動作性が強くなること がある（喜ぶ、惜しむ）。
	直接・間接同形感情表現	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「直接感情」も「間接感情」も表せる感情表現 2. 「恒常性感情」の性質を有している 3. 「間接感情表現」で表す時、直接観察することではなく、日常の言 動、習慣から知ることである 4. 「愛憎」、「好悪」、「恐怖」など抽象的、状態的な「傾向」に限る 5. 形容詞と接尾辞「一がる」のような対立関係が存在しない

[表 1 8] 「感情表現」の各分類の特徴

以上が本論文の概要である。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2001年9月 台湾大学 理学部 数学科入学、2003年2月同中退、同年9月に台湾 政治大学 文学部中国文学科に入学、2008年6月同校を卒業。2009年10月東京国際大学附属日本語学校入学、2010年早稲田大学別科入学、2011年3月修了、同年4月早稲田大学科目等履修生を経て、2013年4月 拓殖大学言語教育研究科博士前期課程入学、2015年3月修了、同年4月同博士後期課程入学、現在に至っている。

修了に必要な単位10単位は既に取得済みであり、外国語検定試験にも合格している。論文提出時の業績は、論文、および学会発表など計6本となる。博士論文完成発表会は、2018年10月20日に実施され、2018年10月26日の言語教育研究科委員会で論文受理が承認されている。博士論文は2018年11月22日に提出されている。審査委員による論文審査は、2019年1月25日拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果、全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2019年2月1日に実施され、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

複雑な日本語の感情や欲求、あるいは感覚などの表現体系を研究し、その使い分けの特徴などによって、新たな分類方法を立てようとするものである。この分類によって感情や欲求、あるいは感覚などの表現全体の構造を明らかにし、より体系的な指導法の基礎を構築しようとすることは、研究テーマとして適切・妥当であると考えられる。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

多くの先行研究、文献資料の調査などを行い、また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)や「名大会話コーパス」などを駆使し、用例を収集したことは、適切、且つ妥当である。

3. 研究方法の適切性・妥当性について

多くの先行研究、文献資料の調査などを行い、それに基づいて研究を進めたことは、適切、且つ妥当であると判断する。また、コーパスを活用し、文脈から感情表現の特徴を明らかにしようとしたことも適切、且つ妥当であると考えられる。

4. 論旨の妥当性

論文の論旨は妥当であると判断する。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

全体の章立てなどの構成に関しては、やや、順番を入れ替えた方がよかったのではないかといった意見も出されたが、修正の要求までには至らなかった。また、いくつかの用語に関しては、あまり的確ではないのではないかという意見があったが、既に修正済みである。表や図に関しては、構成を変えるなどの要求が出たが、修正を行った。副題についても、内容を適切に表していないという意見が出されたが、これも修正済みである。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

従来の感情表現の研究は、「憎い」と「憎む」、「欲しい」と「欲しがる」、「腹が立つ」と「腹を立てる」など、個々の表現に絞ったものであったが、本研究は、このような複雑な日本語の感情や欲求、あるいは感覚などの表現体系を研究し、その使い分けの特徴などによって、新たな分類方法を立てようとするものである。この分類方法によって感情や欲求、あるいは感覚などの表現全体の構造を明らかにしようとしたことは、従来なかったもので、独創性があり、評価出来る。また、感情表現の特徴から感情表現を分類、体系化したことにも独創性が認められる。

蔡嘉紘氏は、この研究をライフワークとし、さらに研究を進め、将来は、感情表現の辞典、教材などを開発したいと願っている。このような点から当委員会は、蔡嘉紘氏が今後、日本語教育の場で実践的な教育者、研究者として大いに活躍するものと期待している。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重、且つ厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。